

ヒュームにおける自己と性格

真船 えり (Eri Mafune)

日本大学文理学部哲学科・非常勤講師

ヒュームにおける、自己（自我）あるいは人格の同一性の議論は有名であるが、それは、『人間本性論』第1巻第4部第6節の「人格の同一性について」における「知覚の束」説としてである。ヒュームは心的実体としての自己あるいは人格の観念を退けたことによって、自己（自我）の存在を否定したとされることもある。確かにヒュームは第1巻において、心的実体として生涯不変化であるような自己の「観念」は否定したが、関係し合う諸知覚の集まりとしての自己の思念は、われわれの実際に経験する事実としてこれを肯定していると考えられる。また、続く第2巻「情念について」の冒頭では、「自己」を、「われわれの親しく記憶し意識する、互いに関係し合う観念及び印象の継起」という、時間的に幅のある、複数の知覚の集まりであるものが、誇りと卑下という情念に共通の、同一の対象としており、自己あるいは人格の存在をまったく否定したわけではない。

ヒュームは『人間本性論』第1巻で自己あるいは人格の同一性について論じる際、自己あるいは人格の同一性を、「思考と想像に関する場合」と、「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」とに区別し、第1巻「知性について」においては、主題は前者であるとして問題を限定していた。ところが、第2巻「情念について」、第3巻「道徳について」においては、自己あるいは人格の同一性の、「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」については、特に一節を設けては論じていない。また、「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」の自己あるいは人格の同一性について、第1巻で区別しておいた後者の問題を論じよう、といった明示的な議論をしていない。それでは、ヒュームは「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」の自己あるいは人格の同一性については、論じなかったか、あるいはその問題に関心がなかったのであろうか。そのようには思われない。むしろヒュームは、『人間本性論』全体を貫くテーマとして、自己あるいは人格の同一性の問題を論証していたと思われる。

このことを考察するために、ヒュームにおける性格（あるいは人柄）(character)の概念を明らかにし、自己あるいは人格(人物)と性格との関わりを考察する。その際、ある人物の行為とその人物の性格、それに対するわれわれの道徳的判断と感情との関係が重要な概念となる。

これらの考察を通して、自己あるいは人格の同一性の問題の「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」についてのヒュームの考えを、性格（あるいは人柄）との関係を通して明らかにするための端緒としたい。なお、本考察では、ヒュームにしたがい、‘self (自己、自我)’と‘person (人格、人物)’、場合によっては‘mind (心)’を、同じ議論の対象と考えることとする。